

主 文

1、昭和二十七年五月九日言渡にかかる原判決中、被告人A 1に対し有罪の言渡をした部分及び被告人A 2、同A 3、同A 4、同A 5、同A 6、同A 7、同A 8、同A 9、同A 10、同A 11、同A 12、同A 13、同A 14、同A 15、同A 16、同A 17、同A 18に関する部分並びに同年七月七日言渡にかかる被告人A 19に対する原判決を破棄する。

2、被告人A 2、同A 3、同A 17にそれぞれ懲役十年に処する。

3、被告人A 19を懲役九年に処する。

4、被告人A 1を懲役八年に処する。

5、被告人A 11を懲役七年に処する。

6、被告人A 4、同A 5、同A 7をそれぞれ懲役五年に処する。

7、被告人A 6、同A 8、同A 9をそれぞれ懲役四年六月に処する。

8、被告人A 10を懲役四年に処する。

9、被告人A 12、同A 15をそれぞれ懲役三年に処する。

10、被告人A 13を懲役二年六月に処する。

11、被告人A 16、同A 18をそれぞれ懲役二年に処する。

12、被告人A 14を懲役一年六月に処する。

13、原審における未決勾留日数中、被告人A 3、同A 2、同A 1に対しそれぞれ九十日を、被告人A 14に対し六十日を、被告人A 17に対し二百五十日をそれぞれ右本刑に算入する。

14、但し被告人A 16、同A 18に附し、この裁判確定の日から三年間、それぞれ右刑の執行を猶予する。

15、押収にかかる刷版機一台（当裁判所昭和二十七年押第一一八〇号の一四〇）、ローラー機一台（同押号の一四一）、木製機械台一台（同押号の一四二）及び偽造千円日本銀行券四千六百十枚（内三千二百三枚（同押号の一四七及び一五一）は被告人A 19より、内千四百七枚（同押号の三、三〇乃至三六、四一、四七、四九乃至五七、六六乃至一三二）は全被告人より）はいずれもこれを没収する。

16、原審における訴訟費用中、国選弁護人山田重次に支給した分は被告人A 14の、国選弁護人藤田馨に支給した分は被告人A 9、同A 1の、証人Bに支給した分は被告人A 17の、証人Cに支給した分は被告人A 3、同A 18、同A 15の、証人Dに支給した分は被告人A 13、原審相被告人Eの、証人Fに支給した分は被告人A 3の、証人Gに支給した分は被告人A 4の、証人Hに支給した分は被告人A 8の、証人I、同Jに支給した分は被告人A 9の、証人Kに支給した分は被告人A 14、証人Lに支給した分は被告人A 6、証人Mに支給した分は被告人A 2の、証人Nに支給した分は被告人A 12の、証人Oに支給した分は被告人A 16の、証人P、同Qに支給した分は被告人A 18の、証人Rに支給した分は被告人A 7の、証人Sに支給した分は被告人A 5の、鑑定人Tに支給した分は被告人A 1の、国選弁護人矢崎勘七、証人Uに支給した分は被告人A 19のそれぞれ負担とする。

17、当審における訴訟費用中、国選弁護人堀嘉一に支給した分は被告人A 6の、国選弁護人岡義順に支給した分は被告人A 9、同A 11の、国選弁護人三浦斧吉に支給した分は被告人A 12の、国選弁護人上川重徳に支給した分は被告人A 15の、国選弁護人向山義雅に支給した分は被告人A 17の、証人H、同V、同Wに支給した分は被告人A 8の、証人Xに支給した分は被告人A 16の、証人Yに支給した分は被告人A 1のそれぞれ負担とする。

理 由

本件各控訴の趣意は、被告人A 1の弁護人坂本英雄、被告人A 2、同A 16の弁護人常野喜一郎、被告人A 2の弁護人上原秋三、被告人A 4の弁護人坂本英雄、被告人A 5、同A 12の弁護人古屋福丘、被告人A 6の弁護人沖田誠、被告人A 7の弁護人青柳孝、被告人A 8の弁護人三木義久、同堀内清寿（連名）、被告人A 9の弁護人笠井寿太郎、被告人A 10の弁護人古明地為重、被告人A 13の弁護人古明地為重、同佐藤久四郎、被告人A 14の弁護人山田要次、被告人A 15の弁護人藤田馨、被告人A 16の弁護人大塚喜一郎、同平岩新吾（連名）、被告人A 18の弁護人青柳孝、被告人A 8、同A 13、同A 14を除くその余の被告人十六名の弁護人布施辰治及び被告人A 10、同A 16の弁護人森長英三郎（連名）、並びに被告人A 2、同A 4、同A 5、同A 6、同A 9、同A 16、同A 17、同A 19ことA 19各本人提出の控訴趣意書に記載されたとおりであるから、いずれもこれをこ

二十 被告人A15の弁護人藤田馨の控訴趣意について

一乃至四（事実誤認及び理由のくいちがい）について、

[illegible]

しかしながらこれを要するに原判決の被告人A 15に対する前記犯罪事実の認定には前記のとおり事実の誤認があり、且つその誤認は判決に影響を及ぼすこと明らかであるから、結局事実誤認の論旨は理由がある。原判決はこの点において尔余の論旨につき判断するまでもなく破棄を免れない。

(その他の判決理由は省略する。)

(裁判長判事 谷中董 判事 荒川省三 判事 中浜辰男)